



Sexually Transmitted Diseases Mycoplasma Test

非淋菌性尿道炎における マイコプラズマ測定の意義

日時 2012年12月8日(土) 11:00~11:50

会場 長良川国際会議場 A会場(1階 メインホール)
〒502-0817 岐阜市長良福光2695-2

座長 松本 哲朗 先生
(産業医科大学 病院長)

演者 伊藤 晋 先生
(あいクリニック 院長)



非淋菌性尿道炎における マイコプラズマ測定の意義

伊藤 晋 先生

あいクリニック 院長

[講演要旨]

非淋菌性尿道炎(NGU)の主要な起炎菌は*Chlamydia trachomatis*(クラミジア)であるが、NGU症例のうちクラミジアが検出されるのはそのうち30~40%といわれ、残る半数以上は淋菌もクラミジアも検出されない非クラミジア性非淋菌性尿道炎(NCNGU)である。

*Mycoplasma genitalium*は尿道炎症例から発見されたが、培養が困難なため、長くその意義は不明確であった。近年核酸増幅法による検出が実用化され、NCNGUのおよそ20%の症例より検出され、NCNGUの主要な起炎菌であることが明らかとなった。特に*M. genitalium*は除菌失敗例が多く報告され、再発性あるいは持続性尿道炎との関連も指摘されている。また*Ureaplasma urealyticum*は当初培養法による検出で尿道炎との関連を示唆されたが、否定的なデータもあった。近年*U. parvum*(biovar 1)と*U. urealyticum*(biovar 2)の二つの菌種に分けられ、*U. urealyticum*(biovar 2)はNCNGUの起炎菌と推定されているが、まだ確立はしていない。

*M. genitalium*や*U. urealyticum*は保険適応のある検査キットが市販されておらず、本邦の日常臨床ではほとんど測定されていないが、現在臨床検査会社への委託測定が可能となっている。当院では2005年より原則として尿道炎全例にこれらマイコプラズマの測定を行ってきた。コストの問題はあるが、保険診療の収入内で十分実施可能と考えている。

本セミナーでは当院の1,000例余の尿道炎データを中心に*M. genitalium*、*U. urealyticum*の尿道炎、特にNGUにおける重要性をお示しし、今後の尿道炎診療におけるマイコプラズマ測定の意義についてについて考えてみたい。